

# (公益団体) キンダー・キンダー

シュテファン・フォン・レヴィース・オブ・メナーによる

2003年8月25日大阪における講演



## はじめに

大阪にお招き頂き、今日みなさまと交流する機会を与えて頂いたことに感謝しております。今日のこの出会いをドイツ側にとっても実りあるものになりたいと思います。また私たちの活動が実に活発であることを皆さんにお伝えできたら幸いです。

まず公益法人「キンダー・キンダー」について説明させていただきます。この協会はハンブルクの児童・青少年の文化シーンではすでに重要な存在となっています。私たちの取り組みの中心は「子供のための」文化・芸術であり、「子供による」文化・芸術は二義的な位置づけです。

はじめにハンブルクと、私たちの活動の枠組みについて少し説明させていただき、それから私たちの活動の内容とその構造についてお話しします。重要な、そして実際的な問題がいくつもあります。それらについては短くふれるだけにとどめ、講演後にみなさまが活発に、それこそ雨あられのごとく質問をしてくださるものと予想し、その中で講演でいい足りなかったことを補足していきたいと思えます。

## 枠組み

### ハンブルク

ハンブルクはベルリンに次ぐドイツ第二の規模を誇る大都市です。周辺地域を除いても、人口はなお170万人を数えます。この規模ではもちろんアジアの

大都市に比べれば大きいとはいえないかも知れません。また、ハンブルクはいわゆる都市州（一都市でありながら一つの州のステータスを有する。ベルリン、ブレーメンなど）であり、16あるドイツ連邦州の一つです。連邦制のドイツでは教育、文化政策は州の自己決定事項であり、ハンブルクも州として独自の教育文化政策を実行しています。

オリンパスやヤマハ、パナソニック、カシオといった多くの日本企業がハンブルクに欧州全体のヘッドクォーターをおいています。これも無理からぬことです。ハンブルクは港湾都市としても長い歴史があり、ハンブルク港はヨーロッパでも最も重要な港の一つであります。

私自身もハンブルク生まれで、子供の時からすでにいっばしのお国自慢、ハンブルクを身びいきすると言う風でした。4歳で違う町へ引っ越すのですが、そこでも日曜日ごとにハンブルクの旗を子供部屋の窓からはためかせたりしたので当然のことながら土地の子たちからいじめられました。

この郷土愛は、私がハンブルクでふれあってきた、気持ちのよい人々との体験に基づいて形成されたのです。またこの郷土愛はとりわけ、その街の美しさにも根ざしています。ハンブルクは大変緑豊かで、公園などの緑地面積が大きくとられ、ほとんどの道路に街路樹が植わっています。市の中心部にはアルスター湖という堰止め湖があります。またエルベ川という河川もあり、これらはハンブルクの魅力の一部にもなっているのです。

しかしハンブルクはまた文化都市としても重要な位置づけにあります。バレエ、オペラ、大劇場、ミュージカル、などハンブルクが発信する文化活動は一都市の枠を遙かに超えています。

### ハンブルクと子供文化

今はベルリンやミュンヘンの方が子供のための文化活動が盛んなようですが、この分野の歴史や伝統はハンブルクの方がその二つの都市よりも長いのです。すでに1529年のハンブルクの憲法に芸術教育や子供のための文化活動の重要性が説かれています。ちなみにあのバッハやテレマンも18世紀初めにハンブルクで音楽教育に携わりました。バッハはごく短期間でしたが、テレマンはかなり長期間その役目を果たしました。

20世紀の20年代、30年代には都市州独特のゼナートと呼ばれる州政府が、社会政策の一環として、特に児童・青少年の文化政策に重点を置きました。

ハンブルクの各所に青少年会館、遊びの家、少女会館などが造られました。受講が任意に出来る教育機関である市民大学 Volkshochschuleは、その財源のほとんどを州に依存しますが、講座編成の重点の一つは芸術文化の分野におかれています。

この市民大学もこの時期に拡充されました。この政策路線は第二次世界大戦後も引き継がれます。

1968年という年はおおかたの西側諸国の社会にとって大きな転換の年でした。各地の学生革命がドイツにおいても、また文化芸術のシーンにおいても大きな変化をもたらしました。いわゆる「フリーシーン」が生まれ、活発になりました。これは既存の確立されたインテリ階層による文化の対立軸として自ら

を定義し、芸術活動の発露の場を違う場所に求めたのです。それはストリート、工場の廃屋などでした。

この動きと連動して、新しい教育の理想が生まれます。いわゆる非権威主義的教育です。この考えの基では子供たちは自由に、自己決定のうちに、強制を排除して育つべきとされました。彼らの発達を抑えつけたり、妨げたりせずに伸ばすことが、社会を変革させる基盤になると考えられたのです。

従って、1968年の空気に大きく影響を受けた芸術家たちがたくさん、子供の文化に向き合いました。そして女性解放などのテーマが中心に据えられました。この時代数多くの児童演劇集団が結成されましたが、そのうちの多くが今日でも活動しています。70年代には新しいジャンルが登場しました。「ドイツの新しい童謡」というものです。フレドリック・ヴァーレ Fredrik Vahleや特にロルフ・ツッコヴスキ Rolf Zuckowskiの作った歌は子供なら誰でも知っているものとなりました。

これらの芸術家たちは、活動の場所として既存の施設を多く選びました。つまり幼稚園、青少年会館、図書館、区民会館などがその舞台でした。

1968年以後の数十年のあいだに、既存の芸術家たちとフリーシーンの芸術家たちは互いに歩み寄り、一部では融合も見られました。

この68年組の教育的原則の多くは今日批判的に見られています。しかしいざにせよ、一つの点では彼らは正しかった。つまり、子供のことを真剣に受け

止めなくてはならないということです。子供たちは大人とは違う。しかし大人より馬鹿なわけではない。「子供なんだからこれで十分」などという人は了見違いだということです。子供たちには最上の音楽、最上の演劇が必要なのです。彼らの五感の要求を安っぽい代用品で間に合わせたりしてはいけないのです。

だからこそ我々は努力してきたのです。それが実って、いまではハンブルクには二つの常設の児童演劇のための小劇場があります。一つはフンドゥス劇場 FUNDUSで120席を有し、今ひとつは子供劇場 Kinder Theaterで約250席あります。また各美術館は子供向けに数々の活動を行っています。州政府による青少年ミュージックスクールは音楽に関わる幅広い教育活動に貢献していますし、そのほかにも数々の試みがなされています。

### **近年の社会動向**

ハンブルクの子供の数はどのくらいでしょう。今日ハンブルクには約27万5000人の0歳から16歳までの子供がいます。その約1/3が片親家庭です。これはハンブルクがシングルの多い都市であることや、また離婚率の高さにも起因しています。子供たちの余暇時間は習い事やスポーツクラブの活動などのスケジュールで埋められています。ハンブルクの交通は激しく、建築や工事も盛んなので、戸外に遊び場を見つけることが出来ないため、体を動かしたい子供たちには各種スポーツクラブやアドベンチャー型の公園といった施設が必要です。

同様の対策の必要性は芸術文化面にも当てはまります。たとえば家族数がどんどん減る中で、家庭で歌うことがほとんど無くなっています。子供たちが知っている歌は減る一方ですし、子供たちの声帯が明らかに短くなっているとの耳鼻咽喉科の医師たちの報告もあるぐらいです。

### **キンダー・キンダーの活動目標**

#### **キンダー・キンダーの一番重要な強み、芸術教育**

最近の調査では、芸術教育が美術工芸的な能力以上のものを引き出し、伸ばすことが分かっています。重要な、決定的な能力というものはそのように習得する物なのです。たとえばあなた方のうちの誰でも、一度でもオーケストラで演奏したことや、他の人たちと舞台上に上がって演じた経験があればすぐに分かることですが、創造性、規律、チームワーク能力、コミュニケーション能力など

はそうした体験の中で培われるのです。

特によく知られるようになったハンス・ギュンター・バスティアン教授の長期観測による研究では、6歳から10歳までの基礎学級における音楽教育が知性や好ましい社会的行動、集中力などを高めることが分かっています。

キンダー・キンダーはこの子供にとって多くは未知の世界に足を踏み入れるお手伝いをしたいと考えています。クラシック、新音楽、ジャズ、伝統的なまたは実験的な演劇作品等にふれる楽しさを伝えたいし、自分でも芸術活動が出来るということを示したいのです。

### 文化的伝統をまもる

ヨーロッパ文化の独自性は、一つにはキリスト教とその価値体系により、また今ひとつには17世紀以来輩出したヨーロッパの芸術家たちの突出した功績によって際だっています。シェークスピア、バッハ、ピカソ等がヨーロッパ文化の最高峰の一つだと言うことに反論する人は少ないでしょう。しかし実際は、こうした文化遺産が児童や青少年の意識の中ではどんどん影が薄くなっているのです。なぜクリスマスを祝うのか、それがキリストの誕生の喜びを表すものだということを知らない子供たちは少なくありません。また室内楽のコンサートに行く人の平均年齢はどんどん上がって今はほぼ60歳です。若い室内楽のファンは育っているとはいえません。

このような問題は近年より顕著になってきました。キンダー・キンダーは今後、より重点的にこの偉大な欧州文化の遺産にふれる楽しみ・喜びを子供たちに伝えたいと考えています。私たちは、自分の文化の根っこを持つこと、知ることが重要だと考えています。特にグローバル化する世界で自分を見失わず、自己決定しながら活動しようとする時、それは重要なのです。

### 新しいものへの好奇心

このように我々が文化的伝統により重点を置くのは、未来を見据えているからなのです。しかしそれがキンダー・キンダーの新しい、実験的な形態の音楽や演劇に対する関心を弱めることにはなりません。この世に生まれて、まだ人生の初心者の子供たちにとっては、一応何でもすべてが新しいのです。それがヨハン・セバスチャン・バッハであれ、ジョン・ケージであれ。私たちは目と耳を大きく開いて芸術の多様さを受け入れたいし、子供たちもそのようにして様々な視点から世界を見るようになるのだと確信しています。そうすることで私

私たちは子供たちの人格形成に小さな一助を果たしているのです。

### **他者を知り、尊重するー世界の様々な文化**

この世界全体と私たちをつないでいるのはインターネットやテレビだけではありません。私たちの住む町にも実に様々な文化圏からの人々が生活しているのです。ハンブルクに居住する外国人の割合は人口の15パーセント。ハンブルク在住の日本人は2000人を越えています。これら外国の人たちがそれぞれの文化をもたらし、ハンブルクの生活の一部となっています。

キンダー・キンダーは、異文化を知ること、そしてそれを尊重することが非常に大切だと考えています。そのようにして初めて私たちは互いを理解し、互いから学び、そして人間として成長できるのです。

この点において、キンダー・キンダーは時として、表面的な体験方法をも厭いません。たとえば、子供たちは、宗教的な背景を知らなくてもベトナムのドラゴンダンスを楽しめます。にぎやかな色彩と音を楽しんだ思い出は、成長してからその文化と真剣に取り組むことの引き金になるかも知れないのです。

### **一時的な楽しみと持続する楽しみ**

キンダー・キンダーは、プロジェクトを作成する時、教育的な配慮を中心に据えることはしません。なによりも芸術を楽しむこと、芸術と遊ぶことが大切だと考えるからです。芸術は、その独自の言葉を遺憾なく語り、善意からであってもなにかの意図を押しつけられたいしない時に、初めてその力を発揮できるからです。

### **活動内容**

#### **キンダー・キンダーの歴史**

キンダー・キンダーの発展の歴史は私個人のそれと一体であります。これまで私の上司は私でしたし、決まった職員もいません。教師の実習を終えた時、私には仕事が見つからず、サクソフォン奏者として糊口をしのぐ一時期を経て、私は友人たちと文化イベントのマネジメントを行う事務所を設立しました。全くの偶然からベルリンの子供フェスティバルと接触し、それが契機となって1987年にハンブルクで初めてのフェスティバルを実行することになりました。その当時は単純にベルリンの協力の下で、ベルリンのプログラムを踏襲したに過ぎませんでした。

そのときの体験が私にはとてもたのしかったのです。子供フェスに参加したア

アーティストたちは、総じて大人の文化シーンの人たちより思い上がりのない人たちでした。観客としての子供たちは正直に反応してくれるし、熱狂もしてくれます。反面、彼らは厳しい批評家でもあります。そして私はこのようなイベントが社会的に大きな意味を持つと思いました。大人の文化シーンでは毎日のように幅広い分野の文化的催しが供給されています。しかし当時子供向けのもは本当に少なかった。子供たちをターゲットにしたものはテレビの夕方番組か、ビデオゲームがせいぜいでした。このようなメディアでは、強いものが正しいとされたり、争いを解決する手段としての暴力は合法的だと表現することがしばしばです。

私たち、といっても私と数人の友人たちですが、その私たちも独自のプログラムを開発する必要があると考えました。というのもベルリンのプログラムはあまりに一方的に娯楽的方向に偏っていたからです。

そこで1988年の秋に約20人のハンブルグ市民が公益法人キンダー・キンダーを設立、我々のフェスティバルの主催者となりました。また12年前からハンブルク文化省がこのフェスティバルの財政支援を行ってくれています。以来今日までの間にこのフェスティバルはこの分野の音楽および演劇作品にとって国際的に重要な場となったのです。

ここ数年はキンダー・キンダーはさらにいくつものプロジェクトを展開するようになっていきます。その例を挙げますと、

### **ラウト・ウント・ルイーゼ**

私がこの子供音楽祭「ラウト・ウント・ルイーゼ」を発案したのは10年前のことです。きっかけは、私がデュッセルドルフの音楽家ミヒャエル・ブラトケの制作するたくさんの、楽器になるインスタレーションに感動したことでした。そのインスタレーションで子供たちは自由に遊べ、演奏できるのです。私たちは彼の作品すべてを一つの公園に集めて紹介したいと思いました。他にも音楽や楽器制作のワークショップ、いろいろな遊びの紹介、また主に子供による、一部は大人のアーティスト等による舞台上でのプログラムがありました。

この音楽祭のために市内にある「プランテン・ウン・ブローメン公園」を会場とすることが許可され、さらにハンブルク中央区役所からの財政支援も得ることが出来ました。この催しは今日までの間にキンダー・キンダーが提供するイベントの中で最も人気のあるプログラムとなりました。今年の集客数は約2万人となりました。

キンダー・キンダーは、この子供音楽祭で2002年のドイツ児童文化賞を受賞しました。是非この音楽祭「ラウト・ウント・ルイーゼ」を大阪に誘致して頂きたいです。すばらしいお祭りで、しかも大騒ぎできます。

### 「キンダー・リート（童謡）」

ここ数年私たちは童謡との取り組みを強化してきました。童謡は人が初めて音楽と詩文というものと集中して向き合う「原初的詩歌」 prima poesisであるといえます。

この取り組みについてここでは二つの活動を取り上げます。

まず私たちは童謡というテーマで実質的な交流の出来る場が無いことに気づきました。このジャンルが中身としても、経済的にも大変重要であるというのに、現状はまったくそれを反映していませんでした。私たちはあらゆるアーティスト、専門ジャーナリスト、音楽関連の出版社などに、ドイツキンダー・リート会議に参加し、学術的かつ専門的な議論をそこで行うよう呼びかけました。この会議はすでに2回開催され、幅広い成果をもたらしています。いろんな地域で童謡フェスティバルが開かれるようになりましたし、この会議で知り合ったアーティストたちが共同制作をする例も出てきました。

次に私たちはとてもよく知られている童謡作家のロルフ・ツッコヴスキ Rolf Zuckowskiの一大ツアーを企画しました。エルベ川の河口からチェコにあるその源流ちかくまでを遡るツアーです。ツアーには合計40もの児童合唱団が参加しました。これらの合唱団はその後相互訪問や共演などの交流を行っています。

### 私たちのフェスティバル

さてそろそろキンダー・キンダーの中心的活動である私たちのフェスティバルに話を戻しましょう。

フェスティバルとはいうものの、実は本来のフェスティバルではないかも知れません。と言うのもまず開催期間が長すぎますし、毎日行事があるわけではないからです。開催期間は9週間もあり、その間約35から40ものイベントがあります。そのうち80パーセントは週末に開催され、家族連れがこれるようにしています。私たちは子供たちが大人と共に体験することを大切と考えているからです。

この長い開催期間は出演してくれるアーティストにとっては都合の悪いものです。この間彼らは同業者に会うことも出来ず、その新作を見ることも出来ないのです。また主催者にとっても長い開催期間は苦勞の種です。長期だとフェスティバルのスポンサーを探すのが大変です。特にイベントは市内の実にいろんな場所で開かれるから、なおのこと大変なのです。

しかしそれをのぞけば、この長期間の開催は子供のためにはいいのです。イベントは市内各所で開かれ、しかも9週間の間に分散していますから、フェスティバル期間中に両親やおじいちゃん、おばあちゃんにつれられているようなイベントに参加する機会が増えるのです。

私たちには常設の小屋というものがありませんから、演劇作品ひとつひとつに、コンサート一つひとつに適した空間を探さなくてはなりません。会場としては、ドイツ最大の演劇用劇場であるドイチェス・シャオシュピールハウスにも客演していますし、小さな区立文化会館であるコリブリ Kolibriにも出ています。

企画、段取り、実行まで、このフェスティバルは私が一人でやっています。一番忙しいときには何人かのお手伝いを頼んでいます。フェスティバルの宣伝用には6万枚のプログラムの葉、4000枚のフェスティバルのポスター、2000枚の子供祭り用のポスター、さらに一連のチラシがあります。これらは学校、幼稚園、いろいろなコンサートやお祭りの会場、チェーンのベーカリーショップや劇場、そして各機関などにおかれます。いずれもフェスティバルが会場としてお借りする場所です。

フェスティバルの予算は10万5000ユーロ（約1430万円）です。その半分はハンブルクの文化省と社会・家族省が拠出してくれ、残りの半分はスポンサーと入場券の販売でまかっています。

入場料は大人8ユーロ（1000円程度）、子供が6ユーロ（800円程度）と大変安くなっています。この金額では実費をカバーする以上のことは出来ません。しかし子供向けの催しに「通常の」文化的イベントに払うほどの高い金額を出費してもよいという市民はほとんどいないのが現状です。かつてはチケットをコンピューター・チケット・システムで販売したこともありました。チケットには行き帰りの公共交通機関が無料で使える特典も付いま

した。しかし過去数年間、特に前売り券の料金が低いことに対する苦情が相次ぎ、今年はこのやり方をやめて、ほとんどのチケットは電話のホットラインで販売するという初めての試みをいたします。これによりお客様との密な接触が出来るし、またお客様の相談にも応じられるという利点があります。

しかしフェスティバルを周知させるのに一番力があるのは電子メディアと印刷媒体です。この分野では私たちはメディアと良好なパートナーシップを築いてきました。私たちは互いに具体的なギブ・アンド・テイクが出来る関係にあります。

このパートナーシップこそキーワードといえるでしょう。私たちのフェスティバルは他の国の動揺のイベントに比較すれば、予算も人員もきわめて少ないものです。にもかかわらず毎年わくわくするようなプログラムで開催されます。私たちを支えているのはパートナーや友人による大きなネットワークなのです。大型劇場がほとんど無料に近い金額でその空間と機材などを提供してくれます。各スポーツクラブは私たちの「世界こどもの日祭り」で子供たちにいろんな運動のインストラクターを無償で引き受けてくれます。各協会もフェスティバルのプログラムを会員に発送するのを、自らの費用で行ってくれています。またハンブルクの児童劇団は最新の作品紹介を「私たちはどんどん成長する」というタイトルの元に自らの費用で行い、フェスティバルをより内容の豊かな物にしてくれています。これだけではなく他にもいくつもの協力があるのです。まさにネットワークがキンダー・キンダーの成功の鍵なのです。

私たちの仕事の組織構造についてもっとお知りになりたいければどうぞこの講演の後にご質問ください。このテーマはここで切り上げ、フェスティバルの各イベントの話に移りたいと思います。

何年も前からフェスティバルの幕開けは「世界こどもの日祭り」にちなんだ大がかりな子供祭り Spielfest になっており、民族学博物館を中心に近隣の施設と大学のグラウンドを会場に開かれています。この子供祭りは約8000人を動員する、フェスティバル中最大のイベントとなっています。子供たちはこの祭りで一日中走り回ったり騒いだり、絵を描いたり、各国の舞踏や音楽を楽しんだり出来ます。ちなみに今年はアフリカからたくさんのアーティストたちがやってきます。今年のポスターをご覧ください。この大がかりな子供祭りはメディアの注目を私たちのフェスティバルに向けさせる格好の材料となっています。また各スポンサーにとっても宣伝効果の高い機会となっています。

この幕開けの祭りに続く数週間のプログラムの約1/3は、民間の児童劇団との協力によるハンブルク産の作品です。今回皆さんもその上演をごらんになったと思いますが劇団メールもそのうちの一つです。残り2/3は私たちが厳選した国内、海外の作品を紹介します。そのため時間的経済的に許される枠内で、私はヨーロッパのいろいろなフェスティバルを訪ね、ハンブルクのフェスティバルにふさわしい、おもしろい子供向けコンサートや演劇作品を探しています。このような旅はまた他の同様のフェスティバルの監督たちと非公式に交流出来るいい機会でもあります。

作品を選ぶ際に適用する基準は一見矛盾した要請事項からなっています。  
つまりまず、

**小さい子供たちの文化は大きくなければならない。**

ドイツではいまだによく「子供むけのものは出来るだけ少ない出費で」という原則がまかり通ります。そのため民間の児童劇団の作品には一人芝居や二人芝居がどんどん増えています。これは出演者を増やすとギャラが払えないからです。このような風潮の元、キンダー・キンダーは子供たちの文化が大がかりだったらどんなにすばらしいかを示そうとしています。たとえば今年はスイスの作曲家リナルド・バルディル Linard

Bardillの子供コンサートをドイツで始めて公演するのですが、演奏するのはドイツで最も革新的な弦楽オーケストラ、アンサンブル・レゾナンツ Ensemble Resonanzです。それでも楽団員は22人です。

子供のための文化は大きくなければならない、といっても会場がいくら大きくてもよいと言う意味ではありません。小さい子供たちだからこそ、舞台の様子がはっきりと見えることが大切です。子供を観客にするには、1500席以上のホールはあまり向いていません。

**子供のための文化は小さくなければならない。**

毎日の洪水のような刺激をうまく消化できない子供は多いと指摘されています。五感の一つを使う出し物のジャンルは、聴覚や視覚に集中して得られる楽しみを引き出してくれます。特にその催しが小さな空間で、すべてが見渡せるような場合に、それは成功します。私たちのフェスティバルでは、そうした催しが一番すばらしいイベントになることもしばしばです。そこで今年は児童文学の作品朗読をいくつか、ハンブルクで最も美しい帆船美術館で行います。この催しには最大でも180枚のチケットしか販売しません。

**子供のための文化はなじみのあるものでなければならない。**

子供というものは、すでに裏も表も知り尽くしている話を好みます。そしてこの意味で子供たちを喜ばせてやることはとても楽しい経験です。フレドリック・ヴァーレのようなアーティストもそれが好きで、このフェスティバルに参加してくれるのです。かれは今年アルトナのアブブリーク劇場で歌います。

**子供のための文化は未知のものでなければならない。**

フェスティバルはいつもこれまで体験したことのない音や絵にふれる新たな発見の旅に私たちを連れて行ってくれます。楽しみながら地平を広げてくれるのです。そのいい例がノルウェーの実験的音楽劇「ポイ！ (PoY!)」です。この作品はカンブナーゲル劇場で上演します。

こうして客演してもらった作品の他に、毎年フェスティバルのオリジナル企画もあります。レビューや参加型の音楽劇、ジャズ、クラシック、新音楽など多様です。コンサートには作曲の依頼をするのが通例となっています。公演は放送局用に編集したりCDにして発表したりすることもよくあります。アンデルセンの童話「雪の女王」を当フェスティバルではジャズによる新解釈で公演しましたが、この作品がつい先頃、子供向け音声媒体のAwardである「レオポルト賞」にノミネートされました。この二年間で最も優秀な13作品の一つにノミネートされたわけです。9月24日には審査結果が分かるのですが、ノミネートされただけでも十分に喜ばしいことと考えています。

今年は北ドイツ放送との協力でオリジナル作品を作ります。北ドイツ放送にはビッグバンドがあるので、それ用に音楽をフィーチャーした放送劇を制作し、フェスティバルの最終日に初演となる運びです。

**おしまいに**

ご静聴頂き感謝致します。この後はみなさまからの質問にお答えするのを楽しみにしております。私たちのフェスティバルにはすでに中国、ベトナム、韓国、フィリピン、パキスタンなどのアジア各国からアーティストが参加してくれています。今年はハンブルク日本人学校の合唱団が、ハンブルクで最も有名な聖ミヒヤエル教会、土地っ子がミッヘルと親しく呼ぶ教会の前で歌ってくれます。これが日本とハンブルクの間の児童文化交流が活発になる契機となってくれば、これに勝る喜びはありません。どうもありがとうございました。